

ドイツ（クアオルト）視察報告

1. 目的

ドイツのクアオルトの基本理念を規範に、全国の自治体に先んじて、治療・医療、保養と連携して下呂市のクアオルト健康ウォーキング事業を展開するため

2. スケジュール

7月21日（日）日本からドイツへ移動

7月22日（月）ヴェルデンベルク州 バーデンバーデン市

7月23日（火）ヘッセン州 バートナウハイム市

プファルツ州 コブレンツ市

7月24日（水）バイエルン州 バートキッシンゲン市

7月25日（木）JNTO（日本政府観光局）フランクフルト事務所訪問

HIS フランクフルト支店長らとランチミーティング

* 22日～24日は岐阜県同行視察、25日は下呂市単独視察

3. 視察員

市長 森本市民保健部長 熊崎健康課主事



ドイツの概要

人口：8,052 万人（2012 年）（独連邦統計庁）

面積：35.7 万km²（日本の約 94%）

政体：連邦共和制（16 州：旧西独 10 州、旧東独 5 州及びベルリン州）

首都：ベルリン（約 343 万人）

○ドイツは 19 世紀末まで統一国家ではなく、小国や都市、王国、公国が乱立していた。

○そのため、現在においても地域分散化しており、世界トップクラスの企業が地方にも多く見られる。

○一方、情報産業や金融については、一部都市への集中が見られる。



7月22日（月）ヴェルデンベルク州バーデンバーデン市視察

古代から温泉地として知られており、ヨーロッパ有数の温泉地として広く知られている。豊かな自然の中に芸術が融合している療養地

- ・人口約5万人の観光、保養都市。ヨーロッパ有数の温泉都市として広く知られる。

ドイツ語で「バーデン」という語自体が「入浴」を意味しており、そこから地名がついた。

- ・周辺には森やブドウ畑の豊かな自然が広がり、18～19世紀にはホテルやカジノが整備され、ヨーロッパ中の王侯貴族や文化人がこの地を訪れた。

- ・黒い森のハイキングやブドウ畑の散策を楽しんだ後、スパやエステで疲れを癒し、川沿いの散策路の散歩やカジノやコンサートで優雅な時間を過ごすことが出来る魅力満載の街

- ・クアハウス（交流施設）、トリンクハレ（飲泉場：現在は飲泉なし）、テルメ（温浴施設）等を見学。

●散策路で散歩をしている方々



●クアハウス（交流施設）



●カラカラ浴場；水着を直用して入る入浴施設 （ぬるめのお湯）



●トリックハレ（飲泉場；現在は飲泉はしていない）



●広場に点在する芸術作品



バーデンバーデンは、歴史あるクアオルトであり、療養客や観光客が多く滞在していた。公園内には技術作品の展示もされており、アートディスカバリーが開催される四美地区でのクアオルトを想像させる内容であった。市側との交流はなく、ガイドによる視察を行った。

街並み
(歩行者天国)



7月23日（火）プファルツ州コブレンツ市

- ・ユネスコ世界遺産に登録された「ライン渓谷中上流部」の最下流にある人口15万人のライン川観光の拠点都市であることから、昼間人口は約35万人で、多くの人が周辺の都市からコブレンツへ仕事や学業のために通っている。
- ・古くからライン・モーゼル川クルーズの起点として観光に力を入れ、ライン川観光に来る多くの観光客がコブレンツに宿泊する。
- ・水上交通の要衝として古くから発展し、また軍事的にも重要な場所であることから、街の周辺には堅固な城砦が築かれた。中でも最大のエーレンブライトシュタイン城とそこから見るライン川とモーゼル川の合流する景色が観光客の人気を集めている。
- ・観光客誘致のために、周辺都市との広域的な連携を重視しており、世界遺産として認定された地域内の自治体と広域的な協会を設立。また、ドイツ国内の歴史的観光都市で構成する団体にも加盟し、共同で国内外へのPR活動をコロナ禍の時期も継続して行い、知名度アップを図り、コロナ禍からの回復も早かったと。



●美濃加茂市長のプレゼンテーション
ライン川周辺での観光の再開発や周辺
市町村との連携について



●コブレンツ市長との歓談

●ゴンドラから見たライン川

街中心地から川を渡るゴンドラが運航している



●堅固な城砦

軍事的にも重要な場所であったことがうかがわれる



●コブレンツ市長らと岐阜県視察団



ユネスコ世界遺産に登録された「ライン渓谷中上流部」に位置しているコブレンツ市は、人口約 15 万人の街で、観光宿泊客は右肩上がりで 2023 年には 89 万人。世界遺産登録で観光客が増えたのではなく、園芸博覧会（各年ドイツ各所で開催）の誘致による街づくりで観光客の増加があったとのことであり、園芸博覧会前後の航空写真からは、街づくりにより「車の入れない道が増加し、緑が増え」住みやすく観光しやすくなっていた。また、観光マーケティングでは、若者向けのインスタグラム発信が功を奏しているとのことであった。

コブレンツ市では美濃加茂市長が木曽川の日本ラインの今後の活動について報告。

報告後には、ライン川を横切るゴンドラに乗車し、市中心部対岸の丘に位置する城砦エーレンブライトシュタイン城へ移動し、コブレンツ市長らとコブレンツと岐阜県の相違点等について意見交換し、お互いの観光客誘致について歓談した。

7月23日（火）ヘッセン州バートナウハイム市視察

・ドイツのクアオルトとして昔から知られ、街の至る所に泉が湧き、豊かな水と緑が特徴の閑静な街。心臓疾患や神経疾患に効果がある塩分を含んだ炭酸泉を持ち、ドイツ国内外にも知られた温泉リゾート。人口は約 32,000 人。

・フランクフルトから北へ約 30 km にあり、ドイツ国鉄の駅から徒歩圏内に市街地がコンパクトに形成され、病院や公園、カフェのほか、教会、公衆浴場などがある。リハビリ・療養を目的にドイツ国内をはじめ、周辺国からも人が訪れる。

・街は徹底して環境が保護されており、公共の駐車場は車が人目に触れないように植木で覆われ、公園や通りは静かで車道の横断は療養客が優先、車椅子の通行にも困らないように歩道の段差が無いよう配慮されている。

・炭酸泉と塩分濃度が高い豊かな地下水の存在が特徴であり、9カ所の泉が存在し、多くの飲水施設がある。これらの水は消化器疾患や高血圧などに効果があり医師の指導の下、薬として飲む。

・市内には13の病院があり、同規模の市と比較しても多くの病院を擁し、病院間のネットワークがよく、充実した療養・リハビリが行える街として、医療関係者の間で良く知られている。



●バートナウハイム市長から歓迎の挨拶



●岐阜県知事がゴールデンブックへ署名

●下呂市長のプレゼンテーション
下呂市のクアオルト健康ウォーキングについてと下呂市の紹介



●ガイドの案内でクアパーク（保養公園）の視察



●塩分を含む地下水を利用した療養風景



●様々な感覚の刺激による療養ができる

砂の上を素足で歩くことによる刺激

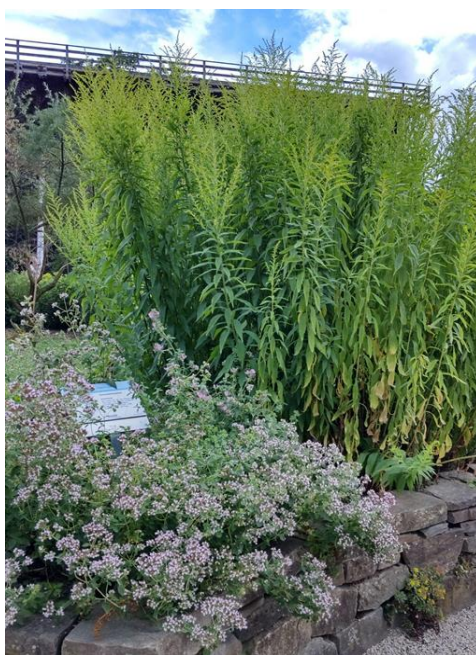


空間の中で声を出すことによる音の刺激



●クナイプ治療設備

●薬草園



●クリニックの視察



●リハビリ施設



バートナウハイムはフランクフルトから 30 分ほどで訪れることができる立地であり、年間宿泊数は 65 万件。炭酸度と塩分濃度が高い豊かな地下水が特徴であった。

市役所において山内市長が下呂市の紹介とクアオルト健康ウォーキングの取組みについて報告した。バートナウハイムからは、ドイツのクアオルトについて報告があった。

クアオルトの治療方針は「運動、マッサージや正しい食事そして心の健康」であり、予防医療が基本にあるとのこと。

その後、市内のクアパークをガイド付きで視察し、クナイプ治療設備やグラディエワーク（塩を使った療養設備）、薬草園等の視察を行った。公園内での体験は多岐にわたり、砂の上を素足で歩行する等、触感や聴覚等の感覚からの刺激を加える体験ができるようになっており、当日も多くの方が体験してみえた。

クアパークの視察後には市内のパーク・クリニックへ移動した。本クリニックは、リウマチと骨折後のリハビリを専門としている 165 床の入院施設を有しており、リハビリ機器も多く配備されていた。ドクターからは「早くリハビリに入ること、治療の総額費用を減らせることができる」ことや、ドイツの医療制度の基本（開業医からの紹介→治療の必要性の判断→保険申請→健康保険組合の認証→医療費は国が支払う）の説明を受けた。リハビリについても、社会復帰を目的としていることから、実際の職業への復帰を考えたリハビリが行われており、日本のリハビリより個別性を重視していると感じた。

7月24日（水）バイエルン州バートキッシンゲン市視察

・ドイツの最も美しいクアオルトにも選ばれているバートキッシンゲンは、高濃度の天然炭酸泉や治療用飲用炭酸泉で有名なほか、クアパークや歴史的建造物が豊かな緑の中で美しい風景を形成する街として知られている。人口は約21,000人

・2021年バートキッシンゲンは、他の10箇所（ドイツの他、オーストリア、ベルギー、チェコ、フランス、イタリア、イギリス）とともに「ヨーロッパ大温泉保養都市群」として、ユネスコ無形文化遺産に登録された。

・宿泊客は年間約25万人であるが、うち3万人が治療目的で訪れる。延べ宿泊件数は150万件。平均3.5泊で治療目的の客は3週間滞在する。

・市内には旧市街地が昔の姿で残されているほか、コンサートホールなどの文化施設も多く存在し、音楽コンサートが絶え間なく開催されている。

・宿泊者は1日3.5ユーロの宿泊税を払うが、それには各施設への入場料、飲泉料金、市内バス代が含まれている。

・市内には17の病院が立地しており、5つは国立、12が市立。病院の密度はドイツ国内で1位

●市庁舎



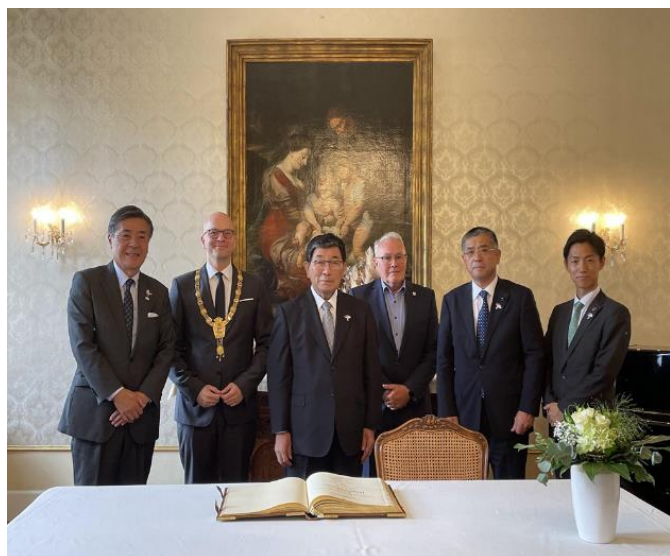
●バートキッシンゲン市長と挨拶



●下呂市長のプレゼンテーション



●岐阜県知事がゴールデنبックへ署名



●バートキッシンゲン市長と岐阜県視察団



●トリンクハレ



●コーンクリニック視察





●バートキッシンゲン街並み

バートキッシンゲン市は「ヨーロッパの大温泉保養都市」としてユネスコ無形文化遺産に登録されており、宿泊客は年間約 25 万人であり、うち 3 万人が治療目的で訪れている。宿泊客は 1 日 3.5 ユーロの宿泊税を払っており、各施設への入場料や引水料金、バス代は支払わなくて良い仕組みとなっていた。

市役所において山内市長が下呂市の紹介とクアオルト健康ウォーキングの取組みについて報告した。その後、知事がゴールデンドブックへの署名を行った。前日のバートナウハイム市でも署名したゴールデンドブックとは、来賓が初めての訪問に際し記帳するゲストブックであり、バートキッシンゲンのブックには、ビスマルクやエリザベータのサインもあった。

その後飲泉施設の見学と飲泉をした。処方された量を飲泉することが重要という事で、飲泉するグラスには目盛りが入っており、適量の飲泉であった。小坂の炭酸泉を薄めたような味であった。

県議会議長、山内市長らは、バートキッシンゲン市長らとの昼食懇親会があり、今後の交流について意見交換を行った。

その後、市内のローン・クリニックへ移動し、院長より治療についてお話を伺った。本クリニックは「うつ病」を専門としているとのことであった。ドイツでも近年はうつ病が増えてきているとのことであり、入院の約 80%がうつ病と適応障害と。治療はグループセラピーを取り入れ効果的であるとの事であった。また、再度治療が必要となるリピート率は低いという事であり、余暇を過ごしながら治療ができる環境は、日本の精神科治療との違いを感じた。ドクターの「薬剤治療は重視していない。患者が選ぶこと」といったお話しは印象的であった。

ドイツでの予防も重視している医療制度は社会保障を守る意義が強く、予防や早期治療することで、社会復帰を早めることができるという事、それが医療の役割であるとお話しされていた。

7月25日（木）JNTO フランクフルト事務所訪問：下呂市単独（観光協会長らと）

JNTO フランクフルト事務所長らと訪日ドイツ市場概況について意見交換を行った。

ドイツ人は温泉に入るといった日本文化に対するハードルが低いという事であり、下呂温泉の持つ観光のコンテンツをドイツへ届けることが必要であることや、ドイツ人向けのプロモーションについて意見交換を行った。

ドイツ人の海外旅行者数は中国、アメリカに次いで第3位であり、コロナ後には「健康」を旅行に求める意識が加わったとのことであり、クアオルト健康ウォーキングと温泉、文化などの融合を進めていくことが必要であると感じた。

その後、HIS フランクフルト支店長らも加わり、ランチミーティングで、ドイツ人の好む観光等について意見交換を行った。

●JNTO フランクフルト事務所でのミーティング



●HIS フランクフルト支店長らとのランチミーティング



●フランクフルト街並み レーマー広場



【視察を終えて】

日本国内では、29 自治体がクアオルト健康ウォーキングを導入しているが、下呂市は清流と温泉に恵まれた土地であり、医療機関との連携が取れていることから、ドイツのクアオルトのように長期滞在し療養する条件が整っている。

まずは下呂市民の健康づくりとしてのクアオルト健康ウォーキングを普及し、子どもから高齢者まで一度は体験していただけるように PR に努めていく。また、クアオルト健康ウォーキングを体験しやすくするためにも、現在の 2 コースではなく各地区にコース整備をしていく。

市民への PR と合わせて市外の利用者も増やす取組として、観光協会にご協力いただき、誘客する方法も模索していく。

【具体的な事業展開】

- ① 下呂温泉病院のメディカルチェックを取り入れたクアオルト健康ウォーキング事業の展開（連携協定による）
 - ・ 10 月以降のクアオルト健康ウォーキングではイベント開催を計画
 - ・ ファンクラブ設立
 - ・ 新たなウォーキングコースの設置
 - ・ クアオルト健康ウォーキングガイドの新規養成
- ② 下呂市クアオルト構想に向けた体制整備
 - ・ 日本クアオルト協議会への加入

加盟自治体：山形県上山市、秋田県三種町、新潟県妙高市、石川県珠洲市、岐阜県岐阜市、兵庫県多可市
島根県大田市、大分県由布市
- ③ 観光協会との連携による観光客としてのクアオルト利用促進
→ クラブツーリズムとの連携